
魔砲少女の世界でデバイスショップ

只野飯陣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔砲少女の世界でデバイスショップ

【Nコード】

N1982BA

【作者名】

只野飯陣

【あらすじ】

無量大数の転生者、百貫える筈の能力を5つしか受けとれず、しかも戦闘に役に立たない才能が大半、そんな彼女がマジカルでリリカルな世界で転生者を釣りながら生きていく話し

ルーレットとか苦手何だ（前書き）

書き始めてしまった

ストーリー上クロスも歓迎

寧ろクロスしたくて書き始めた

三次創作も歓迎、むしろ狙ってた

一気に三話書いたが、分けた意味あったのかな

ルーレットとか苦手何だ

暗い……とてもとても暗い空間で俺は目覚めた。
辺りには光も無く、立っている感覚もしない、そんな空間に……突
如として鳴り響くドラムロールの音色。

デュラララララデュラン！…しゃん

最後の最後にバチがドラムの端に当たった間抜けな音を響かせると
いう、思わずずっこけたくなるような演出の直後に俺の居る空間が
ライトアップされ光に包まれた。

「おーめでーとー」

「貴方は今回神のミス死亡事故無量大数突破記念の特別転生に選ば
れましたー！」

「とーくーてーんー」

「ルーレットを回しますからダーツを投げてくださいーい！そりゃ！」

カララララ！

対照的な二人のバニー美女が交互に喋りながら俺に百本のダーツを
渡してくる。

はつきり言っただけでまったく理解出来ていないが、流されスキルEXは
伊達ではない、ポカンとしながら全てのダーツを投げていた。

「oh……まさか百本渡して命中が五本だけとは」

「ノーコンー」

ほっとけ。

「しかも微妙なのばかり、家事の才能に音楽の才能、工学の天才に物真似の才能、唯一まともなのが召喚能力だけとか」

「きみーおわたー」

いや、説明してくださいよ。

「まあこんな運が無いのも珍しい、こうなったらとことん悲運を極めてきてくださいね！」

「いてらー」

は？

一気に視界が下がり一瞬で二人の姿が消えた。

ああ、落とし穴か、成る程把握、取敢えず最後に突っ込ませてくれ。

「無量大数ってどんだけミスしてんですか」

テンパって突っ込みどころ満載なのに突っ込みどころ間違っ自分が嫌だ。

異性で同性な同居人

俺は今、同居人の料理に舌を満足させながら愚痴を聞いている。

もはや二時間になるだろうか、赤ん坊の頃から意識があり、更には前世の記憶があると言う彼女は家事が上手く歌も聞き惚れる、所謂万能型な人間だ。

召喚術も扱えデバイスも自作出来るという何とも恵まれた女なのが、如何せんストレスを貯めやすく流されやすい。

気が多いと言えば良いのか、家を出れば頼まれる事全てにイエスと答える。

そのせいで今や俺達のコンビは部隊内で便利屋扱いされている。やれやれだ。

「聞ってるのかハクタク！」

目の前で延々と愚痴を溢す女が机を叩いた。

右手に握られた一升瓶がチャプンと音を鳴らし、

「聴いてる、聴いてるから落ち着け」

適当に流しながら料理に視線を戻す。

やはり美味しい、今日も108部隊は激務が待ってるんだらうな、鬱だ。

サイド転生者

俺の愚痴を無視して黙々料理を食べ始める同居人を睨み付ける。

完璧に聞いてないだろ、これは。

暫く睨み付け続けたが此方を向く気配は無い。

俺は小さくため息を吐き出し外を眺めた。

俺は所謂転生者だ。

謎バニーに百本ダーツを投げさせられ五つの才能や能力を貰い、この世界に産まれ落ちた。

赤ちゃんの頃は意味も解らなくて良く泣いたな。ある程度身体の自由が聞くようになって、自分が女だと気付いた時にも泣いた。月のあれが来た時は大分女の生活に慣れてしまっただけだが、それでも絶望した。

それは最近の記憶だな、辛かったんだよ、妊娠とか多分死ぬよ、女って凄いな。

まあそれでも女の肉体に男の精神は何かと不便だ。

性同一性障害みたいなもんか？と思われるがあれは思考だけでは無くホルモンバランスや何やらで拒否してしまう程になるらしい。生憎と完全に、ホルモンバランスや何やら肉体は完璧な女だった俺は恥ずかしいとは思っても拒絶はしなかった。

単なる女装であり、ファッションだと割り切れたからかもな。

まあ今では男の時より色々なジャンルの服に手が出せるからそれなりに楽しませて貰ってる。

お陰様で女として違和感が無くなったがな、畜生。

流されやすいからって肉体に精神が流されるって、俺は単純なのかもしれない。

「時間だ」

不意に、同居人であるハクタク・ウワラルクが席をたった。

俺は思考の海に沈んでいた意識をハツと引き上げ、彼の顔を見た。

「じゃあな、行ってくる、お前も無理はしないようにな」

そう言つてポフンと俺の頭に巨大な手を乗せる同居人を睨み付けながら、小さくため息を吐き出した。

「良いから行けよ、今日もどうせ激務だろ、遅刻すんぞ」

軽く手を振りハクタクを追い出すようにシッシツと言う。

それに苦笑を漏らしながら、ハクタクはその場を後にした。

「っ……さて、俺も働きますかね」

腕を伸ばし背の骨を鳴らしながら立ち上がる。

生活スペースからデバイスシヨップに続く扉の前で、軽く髪を結び上げ赤いエプロンをつける。

今日も平和に平穏な毎日を生きますかね。

「らっしゅーせー」

新聞を広げ最近の事件を流し読みしながら、店の扉が開くのに合わせて定型文を口ずさむ。

客は思い思いに市販のデバイスやデバイスパーツを探し店内を歩く。中にはカウンター隣の駄菓子凝視する青髪もいたが、一緒に居た茶髪の女の子に耳を引っ張られデバイスパーツのコーナーに歩いていった。

俺は欠伸を噛み殺しながら新聞を捲る。

最近は何騒な事件も少なくて新聞も話題性に欠ける。

まあ平和は良い事だから文句は無いのだが、どうも退屈だ。

軽く首を鳴らし、新聞をバサリと机の上に投げ棄てる。

と、丁度そのタイミングでさっきの二人組みが歩いてきた。

青髪の手には二世代くらい前の安いローラーが、茶髪は小型のアンカーワイヤーと巻き取りモーター、それに俺の自作の回路を数種持っていた。

「こんな古いローラーで良いのか？それに回路も、高いよ？」

何となく気になり聞いてみた。

士官学校の生徒なのか身体のおちこちに傷が見えるし、何より服装に遊びが少ない。

多分お洒落に使うお金をデバイスパーツに注ぎ込んだのだろう。高いからな、デバイス。

「あつ……お金が足りなくて」

「このお店の回路は質が良いですし、妥当な出費ですよ」

タハハと笑い後頭部をかきながら答える青髪とは対称的に、茶髪はしっかり計画的に決めていたらしい。何とも凸凹な二人だ。

「ふうん……嬉しい事言ってくれるな、よっしゃサービスだ。こいつもやるよ」

やはり自分の開発したパーツを褒められるのは嬉しいからな、俺は立ち上がり試作の魔力刃整形機巧を取り出し茶髪の女の子に渡してやった。

「そ、そんなつ悪いです！」

慌てて手をふる茶髪を無視して、精算をすませた商品と同じ袋にぶ

ちこむ。

「ほら、遠慮すんなガキンちよが」

ニヤリと笑みを浮かべながら袋を差し出す。それで諦めたのか申し訳なさそうにしながら袋を受け取ってくれた。

「いーなーティアー」

と茶髪を羨むように見詰める青髪に苦笑を漏らしながら、ティアーと呼ばれた茶髪が何かに気付いたように辺りを見回した。

「そう言えば、今日は旦那さんはいないんですね？」

「ああ、あいつは局員だからな、仕事だよ、因みに夫婦じゃねえから、同居人」

俺はその質問には慣れたもので軽く流しながら否定する。
アイツと同居するようになってからこの手の質問は後を立たないからな、慣れたもんだ。

「ふうん……あつ、スイマセン長々と」

と、ペコリと頭を下げながら店を去る二人に軽く手を振りながら椅子に座り直した。

今日もデバイスショップ【トリッパー】は事も無し……ってな。

過去のあれこれ

俺は捨て子だった。

赤ん坊の頃から自我を持っていた俺は、若い頃は良く親を探してさ迷っていた。

名前も解ってたし、何とかなると思っていた。

施設を飛び出し夜遅くまで住民データと睨めっ子をするようになったのは五歳の頃から。

ネットカフェに籠り管理局にハッキングを仕掛け個人の情報を洗いざらい探した。

それで解った事は、俺を産んだ赤の他人はミッドチルダにはいないという、何とも絶望的な事実だった。

結局、俺は母親という他人探しを諦めその後の4年を歌を歌ったりレストランでバイトしたりして過ごす事になった。

この世界が子供でも働ける世界で助かった。施設は何だか息苦しかったし。

さて、そんな毎日をのらりくらりと過ごしてる内に五年の月日が経ち、俺はとある男と出会う事になる。

良くある転生者にとつての登竜門、他の転生者との会合だ。

最初は御互いに警戒しながら正体がバレないようにしていたというのだから笑える話だ。

どっちもバレバレやっちゅうの。

アイツとの出会いはバイト先のレストランで傷害強盗事件が起きた事が原因だ。

その時俺は間抜けにも厨房で鍋を振るのに必死で気付いていなかった。

全ての料理を片付け手拭いで汗を拭っていたら辺りが騒がしいのに気付いた。

何だ何だと野次馬根性全開でホールを覗いて目に入ったのは、何処

かで見たとような夫婦剣を手に倒れ付した男と、顔を真つ赤にしながら男を睨み付ける女、更には壁にめり込む人相の悪い男。まったく状況が解らないし、後で聞いても誰も呆れたような苦い顔をするばかりで答えてくれなかったから、未だ不明だ。

ただその夫婦剣を見た瞬間に男の正体に気付いた俺は慌てて隠れた。それを目敏く見ていた男も俺に不信感を持ったのか色々調べたらしい。

そこで御互いに転生者と認識し、警戒しあう毎日が始まった。馬鹿か俺達は。

暫くして、御互いに危険は無いと判断してからは和解し、更に奴からここがアニメの世界であるとも教えられた。

正直たいした興味も無かったが、男が原作で不幸になる人を救いたいから地球に行くと言った時は驚いた。

いや、男が地球に行くというのではなく、地球が有ると言うことに。

探さなかったのかって？

多元世界がどんだけあると思ってるんだよ、探す気何ぞ母親がミッドチルダにいないと解って諦めたって時点で解るだろ？つまりはそんな気はおき無かった。

まあかなり最初の二桁台の世界にあるらしいから探したらかなり速い段階で見付かったんだろうけどな。

それでも探す気はしなかっただろうな。今更地球とか言われても。とにかく、そこで初めてこの世界がアニメの世界だと解った俺は、とある壮大な目的を持つようになったんだ。

そう、自分の店を持つという。

料理店か音楽スタジオか、それとも機械弄りか悩んだんだけどな。料理何て毎日作れるし音楽とかはネット投稿や個人でジャケ売出来るだろ。

だからデバイスショップを始めようと決意した。

それに原作とやらを知ってる転生者を探しといってくれて、奴にも

頼まれたし。

だから俺の店、かなり突っ込み所が満載何だよな。

まあそのお陰で「ハーレムうっひょい」とか「俺最強www」とか抜かす馬鹿を大量に釣れたんだが。

うはは、ざまあ。

誰がお前らみたいな糞童貞に股を開くか、死ね、いやマジで。

視線がキモいんだよバハムート三兄弟呼ばれてえのか、サーヴァント召喚されてえのか、脂ぎった目で見てきやがって、サモナイト石無しでも出せんだけ？

……………すまん、取り乱した。

いや、兎に角それ以来俺は自分の店を持つ為に金を貯めて本を買って転生者仲間のコネでカリム？とかレジアス？とかいう人の後ろ楯を得て店を開いた。

従業員の採用条件は転生者、もしくはトリップしてきた者とする。

とか普通に広告に書いたりして、奴との約束も守った。

そのお陰で馬鹿を大量に釣れたし、気の良い転生者とも何人か知り合えた。

それに毎日が充実してる。

この生活は捨てられなかったら無かったかもな、そう言う意味では、母親である他人なアイツにも感謝だな。

因みに、奴は悉く原作介入に失敗し続けて来たらしい。

不憫な奴だ。

日常1

「知らない天井だ」

「寝惚けるな」

ベコンとハクタクに頭を叩かれた。
音がヤバイよ、俺頭を抱えて悶絶してるし。

というか良く見たらハクタクが珍しくスーツを着ている。

コイツは真面目で確り者に見えて実はかなりだらしなく面倒くさがりだ。

朝ネクタイがズレてるなんてしょっちゅうだし、ワイシャツの後ろがはみ出してるなんて毎日だ。

猫舌で一口味噌汁を飲んで、熱さに驚き溢すなんて事もあるし、休日は自宅でだらけてる。

基本、俺がいなきゃ駄目な奴なんだ。

そんなコイツがパリツとスーツを着こなす。ネクタイも問題なくワイシャツも入ってる。しかもよれてない。

胸ポケットにはちゃんと携帯灰皿を入れてるしハンカチにティッシュも持ってる。

ボサボサの髪もポマードで固めてる。

……何だか腹立たしいな。

「一人でそんだけ出来んなら毎日やれ」

そう言つて腰をパンツと叩くが、畜生まったく動じねえ。

やっぱり男と女の差なのだろうか。

「それはすまないが、一タチエックを入れなくても良いだろう」

と顔をしかめながら反論してくるが、甘いなハクタク、お前は自分がどれほどだらしのない人間か解っていない。

お前のだらしなさは上げて行けば枚挙に暇が無いほどだぞ。

「で、何でスーツ何だよ」

「む……士官学校の卒業式がでな」

ああ、だいたいそれで解った。

どうせ良い奴は海に引き抜かれたから余り物の中の福を探しに行くとかだろ、陸は辛いねえ。

「そうかい、まあがんばんな、ハクタク陸曹殿」

と言いながらポンとハクタクの肩を叩く。

縞パンタンクトップとまあそれなりの格好だが今更過ぎてどちらも慌てない。

ハクタク何か叩かれた肩に手をやり深く溜め息を吐いている。そんなに勧誘が嫌なのか。まあ得意では無いだろうが。

「仕事だろ、諦める」

そう言つて壁に掛けられていたツナギ……オーバーホールを着込む。今日は頼まれていたメンテを全て片付けたいから店には顔を出せない。

だから店は真美ちゃんに任せる事になる。

因みに真美ちゃんは転生者だ。例の求人広告に釣られて来たらしい。しかもその目的が保護だと言つただから笑えない。

管理局の闇を調べてる最中に「俺のハーレムに入れてやるよ」とか

ほざいたクソ気持ち悪い変態転生者に邪魔され、管理局に追われる身となったとか。

取敢えずその糞転生者はカスみたいな奴らしいから、屑に変えてやった。

男の転生者ってどいつもこいつも最低過ぎる。絶滅しろよって本当

に……

悪い。熱くなった。

まあ兎に角、そんな経緯があつて真美ちゃんはウチの店で働く事になったのだ。

「んじゃ、気を付けて行ってこい」

「あつ……」

それだけ言い残し俺は工房に姿を消した。
ハクタイの眩きとか聞こえなかった。

「俺の飯……」

聞こえなかったんだよ。

不本意な戦い

デバイスシヨップ何かやってると物騒な知り合いが増えてしまう。管理局しかり聖王教会しかり不良や犯罪者、転生者も、まあしかりだ。

そんな物騒な輩の相手を常日頃からやっていたらストレスも堪るし苛立ちもつものる。

「つーか帰れお偉いさん、部下が泣くぞ」

と、目の前で優雅に茶をしばく金髪美人なカリムさんを睨み付ける。前にも言ったと思うが、この騎士カリムはこの店を開くに辺り色々と便宜を図って貰った恩人の一人だ。まあ、それでも邪魔は邪魔なのだが。

「あら、良いじゃない、貴方が来ないから私から会いに来たのよ？」

と花が咲きそうな笑顔で返された。

へーへー美人でござい。

「営業時間外に来てくれよ……」

と激しく肩を落とす、店番をカツミとルードに任せるのは不安なんだ。

因みにどつちも転生者、シフトは昼から夜まで、働き物だが「のわあ!？」「ガシャガシャシャン」「カツミイイイ!」「……ドジと五月蠅いのだ。」

「相変わらず賑やかねえ」

と苦笑を漏らすカリム、クソツ様になる。
女の身である事が悔やまれる。

「んで、本題は？」

カリムに出された紅茶を飲みながら直球で聞く、俺とて暇ではないのだ。

「んっ……新しく部隊を設立する子が居てね、そこに技術協力と、後……生態ロストロギア、欲望のメダルの回収……頼めるかしら」
素晴らしいご提案だなこの暴君は、恩もあれば義理もある、それに此処の自由も見逃して貰ってる。
拒否権なんか無いだろうに。

「行くしか、ねえんだろ？」

それに、生態ロストロギアで名称が欲望のメダルとか……まんまアしだろ？転生者の可能性も高い。

「明日出る……ただし勘違いはするなよ、俺はお前の部下じゃない」

「解ってるわよ、頑張ってるね」

そう言うてにこやかに手を振る。
チツ、この親狸が。

今、俺は第7管理外世界に来ている。

文化レベルはDとかなり低い、この世界には近年犯罪者が良く出入りするようになった。

その理由の一端が八年程前に起きた転生犯罪者事件が原因だ。

かつてこの世界に集まった様々な転生犯罪者が管理局転覆を企み、そして激しい戦いが起きた。

管理局側も大量の魔導師、転生者で包囲殲滅を行った。

……そこで出来た暗黙の理解、転生者を倒せるのは転生者だけなんだ。

結果、大量の転生者と魔導師を犠牲に、この事件は幕を閉じ、管理局上層部は転生者の存在を黙殺。

グレアムやカリム、ナカジマ、提督連中等の考えは珍しく一致した。転生者を自分達で管理……更に管理局に関しては従わない者は排除と言う方向まで話が進んだ。

貯まったものではないのは俺のような管理局にも関わらず、平和に暮らしたいだけの転生者だ。

俺の店を立てようと言う話も、管理局に所属していたあの奴がいなければ叶わなかっただろう。

アイツが顔が広くて助かった。

まあ……店を持つ条件に転生者の勧誘、もしくは捕獲を言われたんだがね。

「さて、過去を振り替えるのも飽きた、だから聞く、お前は転生者か」

崖の端に立ち雄大な大地を見下ろしながら、後ろに立つ男に聞く。

「はあ……あつ……あああ！」

涎を撒き散らしながら叫び、身体から大量のメダルを溢れさせその姿を異形の者に変える。

「……人の心も失ったのか？……まあ俺には関係無いがな」

口に加えていた煙草を模したデバイスを此方に向かってくる男に投げ捨てる。

俺特性の使い捨てデバイス【シガールレス】事前に入力された魔法の術式を発動と同時に解放する。

更に魔力は自前ではなく普段から空気中の魔素から取り込む為、俺みたいな魔力の少ない奴も安心だ。

召喚を素で行える俺には足止めに使い捨てデバイスさえあれば十分だし。

だから俺は専用のデバイスを持たずにこのシガールレスを大量に所持していた。

魔力が足りないのも、理由の一つだ。普通のデバイス使えないんだもん。

「あああ！痛い……痛いいい！」

シガールレスの爆裂に巻き込まれた男……グリードは叫びながらのたうち回り身体からメダルを溢していた。

「悪いな……せめて人として」

小さく呟き、男の前に立つ。

懐からシガールレスを二本取り出し、男の上に投げ捨てる。

バインドガ男に絡み付き、その動きを封じる。

「殺してやりたかったぜ」

軽く右手を掲げ中指と人差し指で挟んだシガーレスをポキリと折る。
シガーレスから漏れ出た魔力を収束し、召喚する。

「せめて楽に逝け」

そして、情けも無く様々な姿のイフリートが現れグリートの肉体を
焼いていく。

「……嫌な仕事だ」

胸ポケットから本物の煙草を一本取り出し、小さく呷いた。
焼け跡から二枚のメダルを拾い、封印術式を詰めたシガーレスを投
げその中に閉じ込める。

「せめて、理性があればなあ」

と、ぼやきながら俺はミッドチルダに帰った。
本当に、物騒な知り合いばかりだよ。

コラボ・D・5さん(前書き)

これはD・5さんの

魔法少女リリカルなのはStrikers へ転生したら魔法？が

ある世界だった

とのコラボです

D・5さんに許可を貰って書いています

コロボ・D・5さん

その日は外が嫌に騒がしかった。

ハクタクから連絡が有り外で馬鹿な犯罪者が暴れているらしい。

正直……直ぐに鎮圧しに行きたかったが、転生者以外への武力行使は過剰戦力と取られかねない為、黙らす事も出来やしない。

ガチャガチャッ！！

小さくため息を溢し、地響きが興る度に荒れていく柵から剥き出しの回路などを回収しながらさっさと終わってくれと願っている時、突然ドアから音がした。

「クソッ！閉まってやがる！！」

面倒事は勘弁してくれ、内心そう思いながらドアまで行った瞬間に

……

「カカオちゃん退いて！オルアッ！！」 バコンッ！！

誰かにドアが叩か……蹴られたか体当たりされた。

しかも向こうの気配から察するに今度は人数を増やしてやるみたいだ。

「勘弁してくれ……」

深く息を吸い込みドアを開ける。

ドアから離れた先にいたのは今にも走りだそうとしている顔がそれなり整った赤い短髪の、活発そうなたつり目の男と、金髪のさわやか

系イケメンだった。

「随分と強引な客だな」

苛立ちながらこの意見を口にしても許される筈だ。

ドアだって無料じゃあ無いのだから。

「頼む、デバイスを貸してくれ!!」

赤毛の男が突然頭を下げて来たが……正直かなり面倒だ。

それに俺の店はデバイスショップと銘打っているがその実態はパー
ツショップだし、置いてるデバイスは一見さん御断りなお手製最高
級デバイスばかりだ。

「いきなり不躰だな」

あまり面倒事に関わりたく無かったからつい突き放すように言っ
てしまった。

今更やり直す訳にも行かずシツシツと追い払うジェスチャーを追加、
だって何か癪だろ。

やるなら積極的に極端につ……てな。

「お願いです!!デバイスを貸してください!ダチのピンチなんで
す!!」

すると突然赤髪が地面に手を付き頭を下げてきた。

所謂土下座だ。ジャパニーズ文化だと思っただらミッドでも土下座は
あるらしい。

まあ地球出身の魔導師や転生者もいるんだから広まっても可笑しく
ない、土下座は日本の悲しい文化だ。

「というかこれじゃ俺が悪役だ……勘弁してくれ、マジで。」

「か、カカオちゃん……!」

「何だか金髪もビックリしている」

「というかお前ら男通しでちゃん付けかよ、俺はそっちにビックリだよ。」

「まあ、理由は解った。多分嘘もついてない、けどどな……」

「……帰りな」

「それだけだ。」

「実力も解らない奴は信用できない、今コイツらが飛び出しても死体が増えるだけって可能性の方が高い。」

「武器を与えたら確実に死地に向かう、なら渡さない。というかさっさとそのダチを連れてシエルターにでも行けよ。」

「待ってちょうだい!!」

「そう考え扉を閉めようとしたら、突然金髪が足を挟み込んで来た。」

「……放せ、今は営業時間外だ……」

「ああ、そんな目で睨み付けんなよ、何とかしてやりたくなるだろうが。」

「話だけでも聞いてくれ!!」

「金髪が無理矢理扉を開き叫ぶ。」

「瞳を目一杯に広げ、必死に声を飛ばす。」

「チツ……さつさと話せ」

「まったく、話なんざ聞く気は無かったんだが、まったくもって若さに当てられたのかね？」

「私達は時空管理局の陸士候補生です！この状況の打破の為にこの店のデバイスを貸していただけませんかでしょうか」

「……さて、どうするか。」

コイツらの発言は一見正義に燃える若者のそれにも聞こえるが、実際には先に言ったダチを優先してるんだらう。

まあそっちの方が共感は持てるが……試すか？

「訓練生？……断る、訓練生は物陰に隠れている。それにいずれ管理局の武装局員が辿り着くだろ、それまで待てばいい」

俺の発言に赤髪が一気に顔を赤くして睨み付けてくる。

「不躰な要求なのは分かっています！ですがこの騒動の犯人の進行方向には避難用シエルターがあるんです！」

金髪も赤髪の援護に入るが、まだ……弱いな。

「だから待てばいいだろ、それにシエルターは頑丈だそう簡単に壊されることは無いだろ……さつさと帰ら……」

ガンッ！！

更に言葉を続けようとした所で、赤髪が一気に頭を下げ床に頭を叩き付けた。

「ダチが・・・あいつが俺達が来るのを待っているんです！！お願いします！！早く行かないとアイツがヴェントが死んじゃうんです！！！！お願いします！！！！デバイスを貸してください！！！！」

「お願いします！！私達の仲間が一人で抑えてくれているんです！」

「「お願いします！！」」

二人して同時に頭を叩き付ける。

正直、もう満足………というかそこまで覚悟してるんならデバイス無しでも飛び出しそつだ。

……でも、なあ？

今更さ、「実は君達を試していたのだよ」とか言ったら完全に寒いじゃん。

だからついつい渋々、本意ではないって態度を取っちゃった。

「……………チツ、ああ、そっぴゃハクタクの奴がエアコンの調子が悪いとか言ってたな」

何だコイツみたいな顔で赤髪が見てくる。

気付けよ、こんな三文芝居してる俺が恥ずかしいだろ、あー顔が熱い。

「俺が奥でエアコン直してる隙に工房に泥棒が入るかもな」

赤髪が怪訝な顔をしだした。

良いからさっさと持ってけよ！恥ずかしくて死にそう何だよ！

「！？」

どうやら金髪は気付いたみたいだ。

よしよし、解ったならさっさと工房に行け。

「……………店も荒れ放題だ、それに管理局に調べられても、盗まれたら諦めるしかないな……………ったく……………あ？まだいたのか、営業妨害だ、出ていけ」

そう言っただ店の奥に速歩きで引つ込む、正直顔の熱さが限界だ。つてあつ、クソツ……………焦って鍵が開かねえ、セキュリティとか気にしなきゃ良かった。

赤髪はまだ気付かないのか後ろから殺気混じりの視線を感じるし……………金髪は俺に頭を下げてから赤髪を引つ張って工房に入っただ。

「……………つはあ……………マジで、顔の火照りがヤバいな」

俺は二人が工房に消えたのを確認してから大きく溜め息を吐き出し、苦笑混じりに顔を手団扇で扇いだ。

「……………間抜けな泥棒にはさっさと出て行って貰いたいんだが」

入って直ぐに二人は出てきた。

俺は慌てて後ろを向き背中越しに、茶化すように言った……………んだが、顔の火照りやテンパリで無愛想になっちまった。

「…ありがとうございます！！」「」

二人の礼を受け取り軽く背中越しに手を振る。

はあ……………かなり恥ずかしかった。

「……………てゆうか何で女口調だったんだ？」

そんな素朴な疑問に答えてくれる奴は一人も居なかった。虚しい。

コラボ・D・5さん（後書き）

D・5さんの

魔法少女リリカルなのはStrikers（転生したら魔法？がある世界だった）のURLです

<http://nknkassyiosgethu.shicon/wng64t3wk/?regunaid=on>

楽しませて書かせて頂きました。

D・5さん有り難う御座います。

またこの話はD・5さんの作品本編のバトルの合間のサブキャラクターの行動に対する、我らが店長のサイドのお話です
どうしてこうなった。と思う方はD・5さんの作品を見てみてください
さい

ランの依頼 1

何時もと変わらない日常。

窓の外には晴天が広がり、ビルに囲まれ……というかビルの間路地にあるようなこの店にも光をもたらしてくれる。

立地は最悪だが隠れた名店だから良いんだよ、それに丁度路地のから出るのは自宅部分、店に入りたきや裏路地を回るしか無いという陰険設計。

それでも客足が途絶えないのは質が良いから、持ってて良かったデバイスマイスターの資格。

軽く首を鳴らしベッドからズルリと抜け出す。

普段と変わらずタンクトップに縞パンという色気が糞程も無い格好だ。

お洒落は好きだが、ありゃあくまで趣味、普段は動きやすさ重視だぜ？

ブラとか着けなくても型崩れないし、任せて安心転生ボディってかとか戯れ言ほざきながら欠伸を噛み殺し、カーテンを開きハクタクの部屋に入る。

未だ夢の中の馬鹿を蹴り落とし、直ぐにキッチンに、朝の変わらぬ行動、平和が一番。

手早く料理を作り、ハクタクを送り出す。

その後は何時ものツナギを着込み店に向かう。今日は良い事が有りそうだ。

商品棚を一別しながら店舗スペースの入り口につき、シャッターを開くと同時に思わずシャッターを降ろしてしまった。

ガラガラピツシャン

そのまま深く息を吸い込み、そのまま吐き出す。

よし、落ち着け、こんな速い時間から店に来る馬鹿はいない、そう
だよ俺に用があるなら裏口から来る筈だ。
そう自分に言い聞かせ、またシャッターを開く。
そこに居たのは無駄に綺麗な歯を見せ付けるように笑みを浮かべた、
銀髪オツドアイの典型的な転生者だった。
因みに俺は苦笑。

「……………入るか？」

流石に店の入り口に立たせとくのもあれなので店の中に招き入れる。
こんなのが店頭にいたらカーネルサンダースがマクドナルドに置か
れるくらい不気味だ。

「……………はい！」

元気良く返事をしてくるがどう考えても間が開いただろ、何だよ。

「それで、ご用件は？」

カウンターに背を預け、腕を組み銀髪を見据える。

何かが思惑通りに行かなかつたのか困ったような思案顔だ。

「……………えつと……………ハハッ」

と言ってまたニコツと笑い掛けてくる。

顔が火照ってくる。

殴りたい程にムカつく、質問に答える。

「どうしました？顔が赤いですよ？」

とか聞いてくるが、良いから質問に答えろ。
シガーレス口に突っ込むぞ。

「で、お前は誰なんだよ」

不毛だ。

というか大体解ってる。

どうせニコポとかナデポを持った転生者だろ？

何人めだろな、ニコポナデポ……

この転生得点はハーレム製造能力と思われてるが実は違う。ただ顔が火照るだけだ。

惚れるわけではない、クソ使えねえ、ざまあ。

「えつと……あの……ハハッ」

睨み付けると明らかに動揺しながら微笑み掛けてくる。

アホか、ニコポナデポを知らなきゃその無駄なイケメンフェイスで勘違いされるかもしれんがな、俺は長年転生者と関わり続けて来たんだぞ。

今更そんな勘違いするか、中身は男だし。

「えつと……貴方は転生者ですか？」

俺がシガーレスを弄び始めると明らかに狼狽えだした。

いや、名前、あと目的、答えろや。

「そつだよ、お前は？」

「……………」

いや、黙んな。

何か、お前は俺を惚れさせたいが為にワザワザ此処まで来て微笑んだらポツ好きっ抱きつとでもなると思っただんか。死ね。

んでもってあれか、惚れさせる自信があつたから裏設定も考えて無かつた。死ね。

つうか此れは完璧にアレだろ、クズ（ハーレム系転生者）だろ。死ね。

「よし解つた。名乗るな、喋るな、大体解つた」

害虫は駆除しなければ。

というかそろそろ開店時間だからこんな奴いたら邪魔だし。

「じゃな」

転移の術式を封じたシガーレスを投げ付けどっかの管理不可世界に投げ捨てる。

「えっちよっ…まっせ」

死ねば良いよ。

多少不快な思いはしたが本日もトリッパーは平常運転。

レジの前に座りバサツと新聞を広げる。

馬鹿どもが機動六課とやらに入りたがったせいで社会現象扱いされ

てやがる。馬鹿しかないのか？

下を見れば何故か管理外世界の喫茶店の広告、管理局以外いけねえだろ。

横に視線をずらす。テロ予告の記事が載ってる。

知り合いの転生者が捕まえた転生者を解放しろと喚いているらしい、とゆうか転生者問題起こしすぎだから。品位を疑うわー。

ふと視線を感じて顔を上げてみる。

黄色が居た。正しくは黄色を背負った女が居た。

「ランか、どした？」

直ぐに視線を新聞に戻す。

あの尻尾は魔性の尻尾だから見たら行けない、明らかにいつか見た青髪が抱き付いてるし。

「デバイスを造ってくれ」

そう言つて札束をボトリと落とす。

思わず口にくわえていたシガーレスを落としてしまつ。

クレジット使え。

「……いつまでだ？」

札束をガツと拾いいそいそとカウンター裏の金庫に入れる。

浅ましい？黙らっしゃい。

「三日だ、クロノに転生者捕獲を任された」

そうかい、クロノが誰かは知らんが。

眉根を寄せるランからするとあまり好きな奴では無いらしい。

因みにこのランは狐尻尾にモフりたいという理由だけでこの姿にな

った馬鹿だ。

しかも尻尾があっても自分についてるからモフれないと愚痴ってる。阿呆だ。

「三日か、急だな、リンカーコアのデータ今日中に持ってきてくれ」
しっかりと金庫の鍵をかけ立ち上がる。

ランが何かの書類をバサリとカウンターに置いたのを見つめ小さく喉を鳴らす。とゆうかヒクツとわづいた、

身体情報、レアスキル、そこは良いが趣味や経歴はいらんだろ。
やっぱり馬鹿だ。

「あー、今から取り掛かる、二日後に来てくれ」

書類を手に工房に下がる。

ランが何かを言いたそうにしていたが無視する。

さて、工房について真っ先に行うのは特性デバイスの肝である回路造りだ。

基盤は飾りだ。とは言わないが回路回りが悪いと転生者の得点能力に耐えられないのだ。

なまじっかインテリジェントデバイスを求めるからそうなる。

人工知能何てただでさえ複雑なのに、理の違う力を処理できる筈がない。

だからオーバーヒートを起こしにくいように回路はかなり気を使う。排熱機構のに効率的に熱が向かうようにしながら、データの移動にも損傷が無いように。

しかも待機状態でそれを造るのだからかなり精密な作業になる。

顕微鏡を通してロボットアームで回線を繋ぎ並べていく。

熱電導率が高いと排熱が間に合わないから銅は使わない。

無人世界の鉱石を溶かし配線に組み合わせる。
氷燐石という冷たい石だ。

頑丈で電導率が高いから重宝する。高いけど。
回路、配線の工程が終わったら次は基盤だ。

インテリジェントデバイスのインテリジェントたる所以の人工知能
もここで造る。

まあ武器に知能とか俺に言わせりゃナンセンスだが、客が求めるな
ら造るぜ？最高のAIをな。

まあ人工知能の分類はOSだから実は苦手なんだが、処理速度は出
来るだけ高める。

結果クーデレなAIが出来上がる。

喋れや意味ないだろとか言うな、会話に処理回すなら計算してる。
インテリジェントデバイスは自己計算出来るから重宝するんだよ。
と、俺がパソコンに向かってカタカタしていると突然肩を叩かれた。

「……………休め」

後ろを振り向くとハクタイが呆れ顔で睨み付けてくる。何だこらハ
クタイの癖に。

「今何時だ？」

と、肩をグルリと回しながら聞いてみる。

少し前に入れた筈の珈琲が冷めていた。

「三時だ」

どうやら六時間も籠っていたらしい。

「そうかい……………後二時間やったら飯造ってやるから待ってる」

首を鳴らしながら立ち上がる。

ポケットから煙草を取り出し火を付けた。

紫煙がフィルターを通り肺に流れ込んでくる。

少し喉がイガイガしたから珈琲を飲み干し凶面を片付けた。

しっかり片付けないとハクタクが五月蠅いのだ。ハクタクの癖に。

「……………はぁ」

ハクタクが何かを諦めたかのように溜め息を吐き出した。

どうでも良いが帰りが速いな、何かあったのか？

「……………速く来いよ」

それだけ言い残し生活スペースに消えるハクタク。

俺は首を傾げながら片付けを再開する。

……………途中でアイディアが浮かび凶面を引っ張り出し書き加えていた
らハクタクに怒られたのは完全に余談だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1982ba/>

魔砲少女の世界でデバイスショップ

2012年1月6日20時45分発行